志高錬成

～志を高く持ち、
よりよい成果を得るために、
粘り強く自分を鍛える～

令和８年１１月６日　２２号
佐久市立浅科中学校　文責：中島

「　私は、下に載せた文章を読んで『ドキッ』としました。みなさんはどうですか…？　」

先週の水曜日（28 日）に前期の通知表が配られました。お家の方のコメントをもらい学校の返却される予定です･･･（よね？）。もちろん、きちんとお家の方に見せましよね？。見せていないとは思いますが「まだ見せていない…」という人は早めに見せましょう。遅くなればなるほどお家の方からの話は長くなるのですから（笑）。また、３年生にとって、これからの１回１回のテストが進路実現に向けて非常に大切なテストとなります。１２月の懇談会に向け、自らの「進路」と「学習」にきちんと向き合って欲しいと思います。

さて、今回の「志高練成」は…「テストの話」ではありません。今回は下に載せた文書を読み、みなさんに考えて欲しいことがあります（最近、このパターンが多いような気がする…）。私がこの文章を読んだ時の気持ち、今でもよく覚えています。それはどんな話だったのか…？。まずは下に載せた文章を読んでみてください。

【 ちょっと読んでみて下さい･･･ 】

だからあれだ、もう19年くらい前の頃にね。だからぼくもあれですよ、29歳とかでしたね。私も20代。今はもう48歳。ねぇ、どうなるんだろう今後のわたし。そんな昔の、とある秋の暖かい昼下がりにね。だからまぁ、ちょうど19年前の今頃ですよ。

ぼくが仕事だったか休みだったかは忘れたけれど、新宿駅の総武線のホームへ向かって階段を上がろうとした時にね。ひとりのお母さんに呼び止められましてね。あのお母さん、あの時38歳くらいだったろうか？。いや、もっと若かったかな？。まぁ、いいね。とにかく呼び止められたから振り返るとね、そのお母さんは、女の子連れでね。女の子は車いすに座っていてね。その子、12歳くらいかなって思ったね。ぼくを呼び止めたお母さんは「娘の車いすをホームまで上げていただけませんか？」とぼくに言うわけです。

「あぁ、じゃぁお母さん、もう少し助っ人を探さないと、2人で上まではきっと無理ですよ」とお母さんの体力を心配して言いましたらね「いえ、車いすだけでいいんです。この子は自分でホームまで上がれますから」ということだったのです。

「あぁ、それならお安いご用ですよ」と言いますとね、それを聞いたお母さんのホッとした笑顔の奥の車いすの上にもね、ホッとして笑顔になっている女の子が見えました。女の子は、お母さんに助けられながら車いすを降りてね、総武線のホーム目指して階段をゆっくりゆっくり自分だけの力で上がっていきました。もちろん階段の手すりにつかまってね。ぼくは、女の子が降りて軽くなった車いすを抱えてね、そのまま階段を上がりましたよ。ぼくの仕事量は、それだけ。女の子は手すりにつかまりながら、ゆっくりゆっくり上がって来て、ホームでまたお母さんに助けられながら車いすに座りました。しばらくすると、轟音と共に黄色い電車がホームに入ってきてね、母娘は、それに乗ってするすると千葉方面へと去っていきました。その時のことを未だにね、ぼくは覚えていて、忘れられない。で、ここに書いたわけですが、まぁ、「良いことをしたんだぜ」という自慢話じゃないですよ。だた忘れられない思い出になっているのですよ。

あの日、ぼくが、総武線のホームに上がろうとした時。お母さんから呼び止められて。「娘の車いすをホームまで上げていただけませんか？」と言われてね。良いですよと引き受けた時に。見せてくれた女の子の笑顔がね。ずっと忘れられないのよ。いきなりホッとしたような。胸のつかえがスッと晴れたような。なんかそんな良い笑顔だったから。

最初にね。呼び止められて、お母さんが「お願いします」ってぼくに言っている時、女の子の表情は、ほんの少し曇っていたから。曇った顔で斜にぼくを見ていたからね。それはそうだよね。女の子には全部見えるんだよね。頼んでいるお母さんの後姿の向こう側、お母さんから頼まれている通りすがりの男の表情が。ずっと見えているんだもの、その女の子にはね。お母さんの声は聞こえないけれど、お母さんの表情を見ていた男の目が自分に注がれる、値踏みするようにチラッと自分を見下ろす。その時の男の表情が丸見えになるんだもの。少しでもイヤな顔をされたら心が痛むだろうと思います。で、ホームの上で分かれるまで、その子の笑顔がずっと続いていたから、あぁ、あの子、ひょっとしてうれしかったのかなと、ぼくには思えてね。もしかしたら、あのまま家に帰り着くまで、あの子は喜んでくれるのかなぁと思ったからね。何だか忘れられなくなりました。ぼくは、その日一日、温かい気持ちが続いてね、そして20年近く経っても思い出すのです。よい思い出です、ぼくにとって。車いすをホームまで上げるという簡単なことで。他人がこんなに喜んでくれるというのが、ぼくには眩しくてね。そうやって喜んでくれた女の子の心根が眩しくてね。いつまでも、あの日の事が心に残ったままなのですよ。それでこの年になっても、あの日のことを覚えている。つまり忘れたくないから、あれから折に触れ、記憶を反芻してきたということなのでしょうね。だから、あの日の事は、多分死ぬまで忘れない。

不思議なことです。あの女の子は、もうとうに忘れたろうにね。もうしばらく続くだろうぼくの人生の中で、戻れるなら戻ってみたいひと時のひとつが、あの日の総武線の階段でのひと時なのです。すんませんね、それだけのことなんです。怒らんといて下さい。お気を悪くされませんで、また明日お会いしましょう。

上に載せた文章は、あるテレビ番組のプロデューサーのブログに書かれていたものの一部です。私は、この文章を読んで、本当に「ドキッ」っとしました。特に…

最初にね。呼び止められて、お母さんが「お願いします」ってぼくに言っている時、女の子の表情は、ほんの少し曇っていたから。曇った顔で斜にぼくを見ていたからね。それはそうだよね。女の子には全部見えるんだよね。頼んでいるお母さんの後姿の向こう側、お母さんから頼まれている通りすがりの男の表情が。ずっと見えているんだもの、その女の子にはね。お母さんの声は聞こえないけれど、お母さんの表情を見ていた男の目が自分に注がれる、値踏みするようにチラッと自分を見下ろす。その時の男の表情が丸見えになるんだもの。少しでもイヤな顔をされたら心が痛むだろうと思います。

この部分を読んだ時、自分の姿を思い返したのです。もちろん、この文章だけで全てが分かる訳ではありません。しかし、女の子の気持ちを「予想する」ことはできます。おそらく、この女の子は、誰かに手伝ってもらわないといけないことが多いのでしょう。その度に、お家の人か自分が「～してもらえませんか？」ってお願いをするのでしょう。その時、全ての人が「いいですよ」って言ってくれた訳ではないと思います。イヤな顔をされた時もあるでしょう。もしかすると「何で自分がやるんですか？」って言われたのかもしれません。イヤな目に遭うたびに「何で自分ばかり…」と感じ、そんな自分を産んだ両親につらく当たったこともあるかもしれませんね。だから、人に何かを頼むのが「不安」になっていたのかもしれません。

人間、不安な時は「いい顔」なんてできませんよね。そんな時「いいですよ」と声を掛け、車いすを駅のホームまで持っていってくれた人がいた。女の子は本当に嬉しかったのではないでしょうか？。私は、この文章を読んで「困っている人がいたら、助けてあげなさい」なんて薄っぺらい道徳論をみなさんに伝えるつもりは１ミリたりともありません。そんなことは「当たり前」ですから。私は、みなさんに「車いすの女の子が感じたこと」を少しでも「分かって欲しい」と思います。全部を分かって欲しいとは思いません。そんなことは無理です。しかし、困っている人のことを「本当に考え」たり「気にかけたりする人」って、誰かに何かを言われなくても、自分がやるべきことは分かると思うのです。私は、みなさんにそういう「心のアンテナ（？）」が高い人になって欲しいと思います。最近、耳を疑いたくなる事件が多くなっています。浅科中の「みんな」が気持ち良く生活するため、言い換えれば、みなさん全員が「より良い生活」を送るため「心のアンテナ」を普段から高めて欲しいと心から思っています。